

# 同郷人のネットワーク形成と郷土意識

—長崎県の離島（小値賀・宇久）出身者を事例として—

山 田 千香子

## I. はじめに

現代社会において個人は、家族という集団に属すると同時に職場としての会社等組織あるいは集団に属しているが、多くの社会的活動はそれらの集団や組織を離れ、個人と個人の間で行われる。個人が実際に取り結んでいる人間関係は、家族関係、親戚関係、近隣関係、職場関係、友人関係など様々である。またそのなかで個人が重視している関係も個人によって多様である。このように個人化し多様化している現代社会の人間関係の実態は、家族といった固定的で宿命的な集団＝団体のみを分析単位としては到底解明できない。家族の流動化、多様化という事態を背景に、家族研究においても、個人を分析の単位とした研究の必要性が叫ばれるようになってきている。つまり、諸個人の行動を、個人の諸属性や集団内地位や役割によって説明するのではなく、集団や組織に縛られず、人が自分で創り出す繋がりを基盤とする個人の周囲に広がるネットワークの性質や内容・構造によって説明することが求められている。

まず、社会的ネットワークという概念について考えてみたい。社会的ネットワークは最広義には、社会システムを構成する諸要素間の関係と定義されるが、最狭義には個人を中心とする社会関係の網の目と規定される<sup>(1)</sup>。概念としてのネットワークは、小集団のコミュニケーションとリーダーシッ

ブ構造に関する社会心理学的研究と、親族とコミュニティに関する社会学的・人類学的研究によって展開されてきた。社会的ネットワーク論は1960年代より発展し、ネットワークの研究では共同体の関係、親類関係、家族構造や政治的帰属など「社会生活の構造的規範」が分析されている。大橋は「現代社会におけるインフォーマルな社会関係は、親族集団、近隣ないし地区集団、遊戯集団、職場集団といった〈集団概念〉のみでは十分把握しきれないこと、そしてそれはネットワークという〈関係概念〉で捉える方が有効である<sup>(2)</sup>」と指摘しその重要性を提起した。

本論では、社会的ネットワークという概念のもとに、「郷土会」という同郷人(本論ではしま出身者)ネットワーク形成にみる「しまとのつながり(関係性)」のあり方と同郷人(しま)意識について考察する<sup>(3)</sup>。個人がどういう状況の中でネットワークを創り出していくのか、あるいは参加するのか。郷土会というネットワークに彼らが期待するものは何か。

また、離島の過疎化、本土志向、高齢化、少子化といった問題が深刻化している現在、「なぜ、しまを出るのか」について離島一般論ではなく、そのしま固有の移動現象もおさえておきたい。しまの暮らし、しまの人々のライフコースについての把握が必要と考える。離島全般の共通性もあろうが、それぞれのしまがおかれた状況、しまのもつ条件、しまの可能性等は、そのしまごとに大きく異なっている。そうした観点から、島の大きさや人口規模が比較的近い二つのしま(町)、長崎県北松浦郡小値賀町と宇久町出身者を対象として調査を実施した<sup>(4)</sup>。この二つのしま出身者を比較することにより、しまの人々の移動の固有性について考察するものである。

本論では、調査対象とした島(町)を指し示す場合、地理的な環境条件に島の集落・文化を包含した意味で「しま」と表現する。

## II. 調査対象者出身地概要と調査方法

### 1. 調査対象者出身地概要

小値賀町と宇久町は、五島列島の北端に位置し南北に隣接している島である。小値賀町は、小値賀本島と大小17の島々で成り立っており、宇久町は宇久島本島と三つの島で構成されている(図1参照)。二つの町それぞれが一島一町の単独型自治体であり、外海型離島としての完結性とまとまりを示している。平成12年度国勢調査によると町の人口は、小値賀町3,765人、宇久町4,009人で、宇久町の人口が200人強多くなっている。両町とも長崎県下では人口減少率が高い地域である。二つの島の人口構成は下記(図2)に示す通りである。人口ピラミッドに若干の相違はみられるが、両町ともほぼ同じような型を示している。20代から30代人口割合が極端に少なく、60代後半から70代人口が多いことが特色として挙げられる。

小値賀町の産業構成は、第一次産業40%、第二次産業16%、第三次産業44%を示し、第一次産業では漁業がほぼ60%を占めている。宇久町の場合、第一次産業37.5%、第二次産業22%、第三次産業40%、第一次産業では、農業61%(そのうち家畜飼養農家が66%)である。第二次産業の内訳は、両町とも建設業が圧倒的に中心的業種となっている。

図1 小値賀町・宇久町の地図

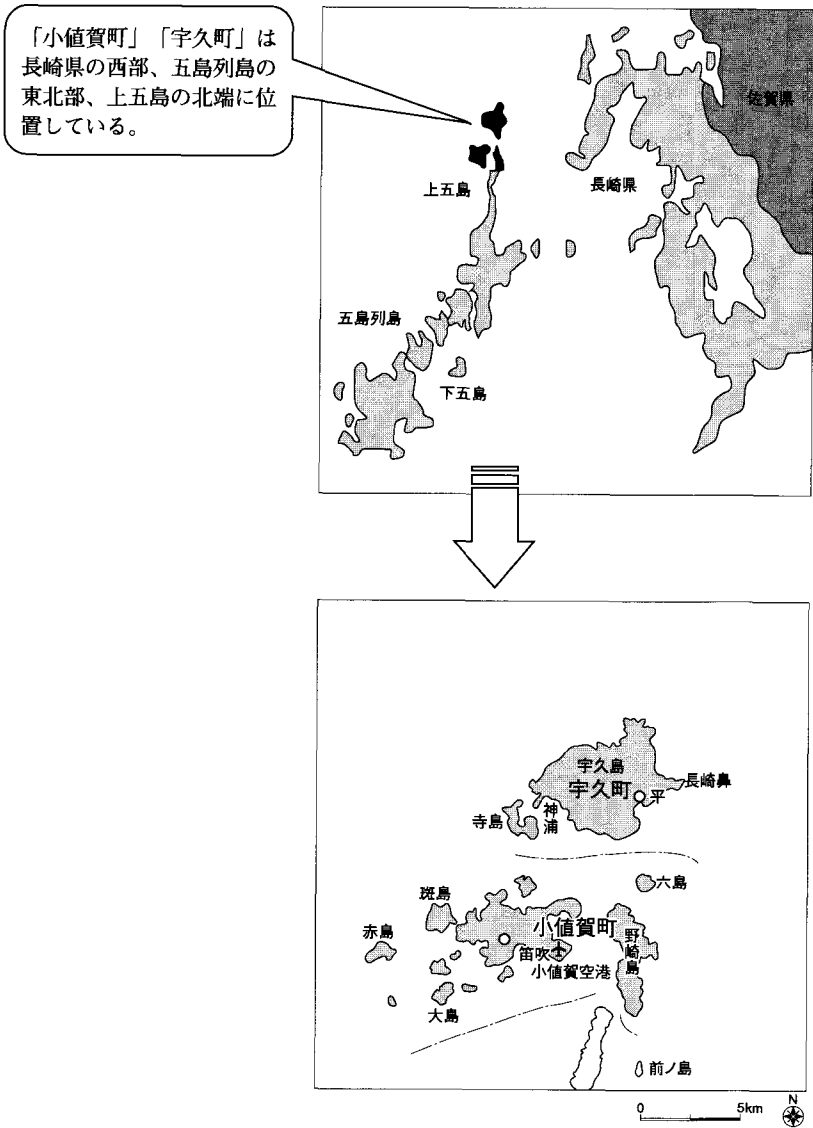
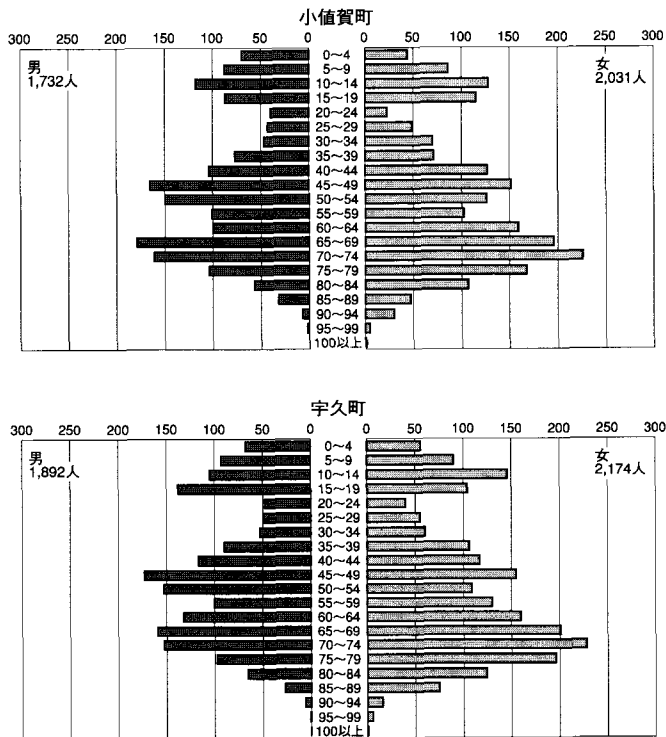


図2 小値賀町・宇久町の人口構成



出所：平成12年国勢調査資料より筆者作成

## 2. 調査方法

調査方法および調査実施期間等については、以下の通りである。

- (1) 調査実施期間：2001年3月25日～2001年4月25日
- (2) 調査方法：質問紙調査法（質問項目数 38項目）

出身者への調査票発送にあたっては、まず両役場に出向いてそれぞれの郷土会事務局を紹介していただいた。各事務局に電話連絡をとったうえで、会員名簿・住所録の送付依頼状を発送し折り返し名簿を送付して頂き、その会員名簿を元に調査票を発送するという手続きをとった。一部の郷土会については、会の希望により役員のみを対象としている。調査票の回収は

返信用切手を貼付し郵送法を用いた。

(3) 調査依頼郷土会：

- ・宇久郷土会 (佐世保宇久郷土会・福岡宇久郷土会・関門宇久郷土会・  
関西宇久郷土会・中部宇久郷土会・関東宇久の集い会)
- ・小値賀会 (県北小値賀会・福岡県小値賀会・関東小値賀会・関西小  
値賀会)

(4) 調査票発送・回収状況

表1 調査票発送・回収状況

	発送数	回答数	回収率
全 体	1042通	479通	45.9%
宇 久 会	629通	268通	42.6%
小 値 賀 会	413通	211通	51.8%

### III. 調査結果の概要

#### 1. 一般的属性

調査対象者の一般的属性（性別・年齢構成・職業・同居家族構成等）は、表2から表6を参照されたい。郷土会の構成員の年齢構成は30歳から80歳代までと幅広いが、とくに50歳代、60歳代、70歳代に集中しており、そのなかでも60歳代の割合が高い。会員の年齢構成としては、全体として高齢

表2 性別 (人)

	性別	
	小値賀	宇久
1. 男性	146	163
2. 女性	64	103
3. 不明	1	2
合計	211	268

表3 年齢構成 (人)

	年齢構成	
	小値賀	宇久
1. 20歳未満	0	1
2. 20歳代	0	0
3. 30歳代	1	5
4. 40歳代	15	15
5. 50歳代	47	74
6. 60歳代	69	96
7. 70歳代	67	64
8. 80歳以上	11	11
9. 不明	1	2
合計	211	268

表4 職業 (人)

	小値賀	宇久
1. 農業	0	1
2. 漁業	1	4
3. 自営業 (農業・漁業を除く)	21	37
4. 公務員	12	14
5. 専門的・管理的職業	20	26
6. 事務的職業	6	7
7. 技能・労務的職業	25	29
8. 販売・サービスの職業	11	17
9. パート・アルバイト	9	7
10. 自由業	3	4
11. 主婦	28	37
12. 無職	61	82
13. その他	5	2
14. 不明	7	3
合計	211	268

表5 同居家族構成 (人)

	小値賀	宇久
1. 一人暮らし	16	19
2. 夫婦のみ	82	111
3. 夫婦と未婚の子供	60	86
4. 夫婦と既婚の子供(孫がいない)	4	5
5. 夫婦と既婚の子供(孫がいる)	16	13
6. その他	27	30
7. 不明	6	4
合計	211	268

表6 家族のなかで (人)

	小値賀	宇久
1. 長男	52	58
2. 次男	31	34
3. 3男	28	27
4. 4男	14	20
5. 5男	9	10
6. 6男以上	3	6
7. 長女	24	42
8. 次女	12	17
9. 3女	7	13
10. 4女	6	10
11. 5女	5	3
12. 6女以上	2	2
13. 末子	35	48
14. 不明	1	1
合計	211	268

化の傾向にあると言っていいだろう。このことは職業にも表れており、「無職」という回答が30%を占めている。家族構成は「夫婦のみの二人暮らし」という割合が高く、退職後の生活を迎えた世代が多く加入していることが読みとれる<sup>(5)</sup>。

また、回答者の背景として長男の割合が高いことが注目される(表6)。これまで人口減少の防波堤と考えられていたのは長男の家産継承であり、それは長男残島という形でしまへ残る者への規制力となっていた。しかしながら、この調査結果からは、必ずしも長男残島となっているわけではなく、しまにおいては長男の家産継承、あるいは後継ぎの慣習自体が崩れていることが指摘できると考えられる。さらに、長女や末子の他出割合も高

いということは、兄弟姉妹の地位に関係なく島を出ているということであり、しまの子ども全体に対して、しまへ残ることへの規制力はかなり希薄化しているといえるのではないだろうか。

## 2. しまのライフコース

### (1) 「しまを出る」：若者の移動

現在、小値賀島・宇久島の高校卒業生は、9割以上が島を離れるのが現状である。大学も専門学校もなく、就職先も乏しく、たとえ、しまに残りたいと思っても、離れざるを得ない状況にある。若者がしまから出る契機について、彼らのしまの生活歴の特徴をおさえながら考えてみよう。多くの場合、中学校・高校までは島内に、高校卒業からは島外に出て行く。なかでも、高校卒業者の9割は進学、就職によって島外へ流出している。島外への高校へ進学を希望する者も少なくない。その場合、自然環境的に家から通うことができず、島外に下宿ということになる。下宿にかかる費用等、経済的負担も大きい。以上のように、現在、彼らの平均的ライフコースは多くの場合、高校卒業後島外へ就職あるいは大学へ進学・卒業しそのまま本土で就職、その後何らかの事情でしまへもどるというパターンが形成されている。これまでのしまへのUターン現状は、親のあとを継ぐタイプのUターンや、都会でうまくいかなかったから戻るというケースで、それもかなり高齢になってからということが多く見られる。

郷土会の加入者は、しまを離れてから、すでに30年から40年以上経っている人が最も多い(表7)。しまを出た年齢はほぼ15歳から18歳に集中している(表8)。離島の理由は「就職」が圧倒的に多く、次に「進学」となっている。続いて「本人の仕事の都合」や、「親の仕事の都合」、「結婚」、「夫の仕事の都合」という理由があげられている(表9)。

### (2) 「しまを出る」：高齢者の移動

割合としては低いが、離島の理由が「子供との同居」というケースがみられるのが注目される。過疎地域で交通のアクセスの悪いところでは、自



表7 しまを離れて (人)

	小値賀	宇久
1. 1年以内	0	0
2. 2～3年	2	0
3. 5～9年	1	3
4. 10～19年	12	10
5. 20～29年	19	23
6. 30～39年	47	68
7. 40年以上	121	154
8. その他	2	5
9. 不明	7	5
合計	211	268

表8 しまを出た歳 (人)

	小値賀	宇久
1. 15歳未満	24	40
2. 15～18歳	80	113
3. 19～20歳	28	34
4. 21～22歳	11	6
5. 23～25歳	15	15
6. 26～30歳	12	21
7. 31～40歳	13	19
8. 41～50歳	3	4
9. 51～60歳	14	4
10. その他	3	7
11. 不明	8	5
合計	211	268

表9 離島の理由 (人)

	小値賀	宇久
1. 進学	42	47
2. 就職	88	125
3. 結婚	7	13
4. 親の仕事の都合	10	22
5. 本人の仕事の都合	43	40
6. 子供との同居	8	2
7. その他	2	12
8. 不明	11	7
合計	211	268

活力が低下した人びとは、自分の家に住みつづけることは困難になってくる。自由回答への記述をみると、「夫が亡くなったため」「夫の病気のため」「医療、島の展望のなさに悲観して」「台風の被害及び医療のため」等の事柄を契機として、子どもの元へ移動する高齢者の傾向が読みとれる。それと同時に、それらの回答からは、しまにおいて病気になった時の不安感やしまの医療問題の深刻さ、さらに「台風の被害」といったしまが抱える問題も浮かび上がってくる。

戦後ずっと、若い人が就学・就業のため、まとまって都会へ出ていったことから、独居や病気になった高齢者が都会の子どもに呼ばれて出て行くことが多いといわれる。それぞれの郷土会の名称は所在地を冠したものが多いが、それは戦後しまからも関東や関西、福岡方面へ出て行った人数が多いことを指しており、30年～40年前の人口移動が、今になって、しまか

らの高齢者移動を引き起こしていることになる。郷土会の会員数からみると小値賀町・宇久町ともに、とくに福岡市や佐世保市における会員数が多く、しまの出身者の地理的広がりや移動先傾向の一端が窺える。

#### Ⅳ. 郷土会ネットワークの形成と結合様式

本章では、郷土会ネットワークの加入動機やその活動内容等について考察していく。

まず、はじめに、結婚という現象も、配偶者選択という一つのネットワーク現象と見なすことができることから、しま出身者の婚姻関係・通婚範囲について考察し、次に兄弟・姉妹・子どもの在住地等を中心とした親族関係のひろがりについてみていくこととする。

##### 1. 通婚範囲

表10・11・12は、回答者とその配偶者の通婚組み合わせについて考察するため、それぞれの出身地を整理したものである。これらの表から通婚圏の範囲をみると、全体の81% (小値賀), 82% (宇久) が「九州・沖縄地方」内であり、さらに、全体の62% (小値賀), 54% (宇久) は長崎県内出身者と結婚している。島出身者同士の組み合わせが全体の29% (小値賀), 31% (宇久), 同じ集落同士の組み合わせは、ほぼ25% (小値賀), 24% (宇久) という割合である。同じ県内出身者同士の結婚が全体の半数を超え、全体の4分の1が同じ集落出身者同士の結婚という地域内婚姻率が高いことが注目される。回答者の背景を考察すると、年齢がとくに60歳代に集中していることから、結婚した時期はおよそ30年から40年前と推測できる。今よりはるかに情報が限られていた時代、同じ地域からの出身者同士で情報を共有し活動を行い、婚姻にしてもその多くが地縁関係を基本としていたというのは当然の結果と言えるであろう。

表10-1 回答者の出身 (人)

小値賀	
1. 笛吹郷	92
2. 前方郷	41
3. 中村郷	8
4. 浜津郷	10
5. 柳郷	21
6. 斑島	8
7. 大島	2
8. 納島	2
9. その他	20
10. 不明	7
合計	211

表10-2 回答者の出身 (人)

宇久	
1. 平郷	138
2. 神浦郷	47
3. 野方郷	4
4. 太田江郷	6
5. 本飯良郷	18
6. 小浜郷	10
7. 飯良郷	9
8. 大久保	23
9. 寺島	6
10. その他	5
11. 不明	2
合計	268

表11-1 結婚相手の生まれ (人)

小値賀	(%)
1. 小値賀	61 (28.9)
2. 長崎県	71 (33.6)
3. 佐賀県	6 (2.8)
4. 九州・沖縄地方	35 (16.5)
5. 中国・四国地方	3 (1.4)
6. 中部・北陸地方	0 (0.0)
7. 関東地方	9 (4.2)
8. 東北・北海道地方	2 (0.9)
9. その他	3 (1.4)
11. 不明	21 (9.9)
合計	211 (100.0)

表11-2 結婚相手の生まれ (人)

宇久	(%)
1. 宇久	84 (31.3)
2. 長崎県	61 (22.7)
3. 佐賀県	17 (6.3)
4. 九州・沖縄県地方	58 (21.6)
5. 中国・四国地方	10 (3.7)
6. 中部・北陸地方	17 (6.3)
7. 関東地方	3 (1.1)
8. 東北・北海道地方	2 (0.7)
9. その他	2 (0.7)
11. 不明	14 (5.2)
合計	268 (100.0)

表12-1 結婚相手の生まれ (人)

小値賀	(%)
1. 笛吹郷	22 (36.0)
2. 前方郷	9 (14.7)
3. 中村郷	4 (6.5)
4. 浜津郷	2 (3.2)
5. 柳郷	6 (9.8)
6. 斑島	1 (1.6)
7. 大島	1 (1.6)
8. 納島	1 (1.6)
9. その他	5 (8.1)
11. 不明	10 (16.3)
合計	61 (100.0)

表12-2 結婚相手の生まれ (人)

宇久	(%)
1. 平郷	34 (40.1)
2. 神浦郷	7 (8.3)
3. 野方郷	1 (1.1)
4. 太田江郷	2 (2.3)
5. 本飯良郷	5 (5.9)
6. 小浜郷	6 (7.1)
7. 飯良郷	3 (3.5)
8. 大久保	3 (3.5)
9. 寺島	2 (2.3)
10. その他	4 (4.7)
11. 不明	17 (20.2)
合計	84 (100.0)

表13 兄弟・姉妹の居住地 (人)

	小値賀	宇久
1. 長崎県	96	117
2. 佐賀県	3	8
3. 九州・沖縄地方	94	125
4. 中国・四国地方	19	21
5. 中部・北陸地方	32	50
6. 関東地方	54	72
7. 東北・北海道	0	2
8. その他	0	4
9. 不明	31	29
サンプル	211	268

(注) 複数回答

表14 子供の居住地 (人)

	小値賀	宇久
1. 長崎県	56	55
2. 佐賀県	6	4
3. 九州・沖縄地方	70	98
4. 中国・四国地方	16	16
5. 中部・北陸地方	10	42
6. 関東地方	49	51
7. 東北・北海道	2	4
8. その他	0	5
9. 不明	58	57
サンプル	211	268

(注) 複数回答

## 2. 親族の居住地

しまにいる家族の中心は(回答者の年齢からみても推測できるが)、大半が親の代から兄弟・姉妹の代、あるいは従兄弟の代に移行していることが窺われる(表19参照。P304掲載)。両親が健在というケースは少なく、しまの生活は母親だけ、あるいは父親だけの生活となっている。親族のなかでも、とくに兄弟・姉妹の居住地(表13)から親族関係の地理的広がりを見ると、最も人数が集中しているのが九州・沖縄地方圏、続いて長崎県、関東地方、そして中部・北陸地方である。この関東地方という場合、とくに首都圏を指すものと考えられる。次に、子供の居住地(表14)をみると、最も多いのが九州・沖縄地方圏、続いて長崎県、そして次が関東地方というように、子どもの場合も兄弟・姉妹の場合と同様な傾向を示している。

## 3. 郷土会ネットワーク

ここでは、郷土会というネットワークを選択する動機(表15)、加入年数(表16)、行事への参加状況(表17)や行事内容等についてみていく。入会の動機としては、圧倒的に「知り合いに誘われて」という回答が多い。そこには、地縁関係に基づいた「知り合い」との「つきあい関係」によって維持されるという、郷土会ネットワークの結合様式の特徴がよく現れている。「誘われて」という回答は「付き合いで」という回答と共通性を含み、

同様のカテゴリーに分類できる。次にあげられている「郷里がなつかしいので」「故郷の情報が知りたくて」「仲間に会えるので」等は、個人の主体的・積極的な選択理由であり、これらの内容に関連した事柄、たとえば、故郷に関する情報交換、同じ言葉で語り合える場、同郷の人々との親睦や交流等が、郷土会というネットワークに期待される役割・機能と考えられる。自由回答欄には「遠く故郷を離れると話をするだけで心の支えになる」「郷土への思いを共にする人を求めて」等の記述があり、彼らの故郷への熱い想いが感じられる。

また、本人の出身地ではないが「両親が出身であったことから」という理由で郷土会へ入会をしている人や、また「他人が勝手に手続き」「いつのまにか知らない間に入会していた」「いつの間にか案内がくるようになった」等の自由記述に現れた回答には、「同じ郷土・同じしまのよしみ」といった地縁関係論理が優先される特色の一端が現れており興味深い。

入会の年数は、加入してから10年～15年という回答が最も多く、次に5年～9年、16年～20年という回答が続いている。加入者の年齢構成は60歳代から70歳代で、しまを離れてから、すでに30年から40年以上経っている人が最も多い(表16)。この世代が、郷土会行事への参加率も高く、それぞれの郷土会活動を担っている年齢層であることが窺われる。彼らは、既に仕事の第一線から退いた世代であり、比較的、時間的余裕や経済的余裕にも恵まれている世代であるといえる。その一方で、人生の「老い」と向き

小値賀		宇久	
1. 知り合いに誘われて	97	1. 知り合いに誘われて	131
2. 小値賀がなつかしいので	52	2. 宇久がなつかしいので	45
3. 小値賀弁を聞きたくなく	5	3. 宇久弁を聞きたくなくて	5
4. 故郷の情報が知りたくて	38	4. 故郷の情報が知りたくて	32
5. 現在の居住地周辺の情報が知りたくて	1	5. 現在の居住地周辺の情報が知りたくて	2
6. 付き合いで	13	6. 付き合いで	18
7. 仲間に会えるので	41	7. 仲間に会えるので	47
8. その他	16	8. その他	30
9. 不明	5	9. 不明	35
合計	211	合計	268

表16 入会してどのくらい (人)

	小値賀	宇久
1. 1年以内	6	5
2. 2～3年	22	18
3. 5～9年	56	58
4. 10～15年	75	53
5. 16～20年	23	31
6. 21～25年	6	12
7. 26～30年	4	12
8. 31年以上	7	24
9. その他	2	30
10. 不明	10	25
合計	211	268

表17 行事への参加 (人)

	小値賀 (%)	宇久 (%)
1. よく参加する	36 (17.0)	40 (14.9)
2. ある程度参加する	57 (27.0)	63 (23.5)
3. あまり参加しない	49 (23.2)	50 (18.6)
4. ほとんど参加しない	55 (26.0)	93 (34.7)
5. その他	4 (1.8)	8 (2.9)
6. 不明	10 (4.7)	14 (5.2)
合計	211 (100.0)	268 (100.0)

合う時期を迎え、故郷への懐かしさを抱く世代と言えるのではないだろうか。

具体的な活動行事として、総会、役員会、定例会、新年会、親睦会、物産展、敬老会、講演会、春の花見会(宇久郷土会)、会報の発行(小値賀会)、会員名簿の発行、昼食会等が実施されている。そのなかで「楽しみな行事」としては、「新年会」「親睦会」「総会」「物産展」「敬老会」「春の花見会(宇久郷土会)」「講演会」「会報」等があげられている。

行事への参加状況(表17)についてみると、「よく参加する」「ある程度参加する」が44%(小値賀)、38%(宇久)である。「ほとんど参加しない」という割合は平均30%に満たない。会員の入会年数や活動への参加状況からみると、郷土会のネットワークは活発とまではいかないまでも、熱心に活動が維持されていると解釈できるのではないだろうか。

#### 4. 同郷人の結合様式

一般社会には文化的に共有された共通の価値観が存在しており、親子関係、同郷関係は無論のこと、目に見えないヒエラルキーが存在する。社会的ネットワークに分類される同郷関係をとってみても、そこには同郷の水平関係だけではなく、兄弟的な上下関係が存在する。それは組織内に止まることなく、私的な関係にも影響を及ぼす。たとえば、地域(しま)およびで親しい友人同士や、信頼関係が構築されたもの同士は、相手を疑似

家族として扱う傾向がみられる。例えば、呼び方も兄弟姉妹や親戚を呼ぶのと同じように、名前とともに、相手の年齢や背景を考慮し、親しみを込めて「〇〇兄貴」「〇〇あんちゃん」「△△姉ちゃん」「△△姉さん」などと呼び合うのである<sup>6)</sup>。このようなネットワークは、場合によっては、遠くにいる親戚よりも親密でしかも強固な相互扶助機能を果たすことが多い。そのような関係性は、しまを離れた郷土会ネットワークのなかにも見いだせるのである。

## V. 郷土意識—しまへの想い

この章では、離島期間が平均30年から40年におよぶしま出身者が、現在、しま（郷土）に対してどのような想いを抱いているのか。島外から見たしまの姿は彼らにどのようにうつっているのか、郷土への想いや愛着について考察する。在郷家族・親族との交流関係を中心に考えながら、彼らの将来のUターン可能性なども含めて考察したい。

### 1. しまへの愛着

「しまへの愛着」の項目（表18）では、愛着を「感じている」という回答が平均85%以上を占めている。そのなかで「強く感じている」という回答だけで半数近くを占める。しま出身者の人々が、いかにしまへの愛着・想いを強く抱いているか窺うことができるといえるのではないだろうか。で

表18 しまへの愛着 (人)

	小値賀	(%)	宇久	(%)
1. 強く感じている	110	(52.1)	117	(43.6)
2. まあ感じている	72	(34.1)	111	(41.4)
3. あまり感じていない	9	(4.2)	19	(7.0)
4. 感じていない	2	(0.9)	4	(1.4)
5. わからない	5	(2.3)	6	(2.2)
6. その他	0	(0.0)	2	(0.7)
7. 不明	13	(6.1)	9	(3.3)
合計	211	(100.0)	268	(100.0)

表19 しまにいる家族 (人)

	小値賀	宇久
1. 両親	9	11
2. 父親だけ	3	6
3. 母親だけ	13	33
4. 兄弟・姉妹	96	133
5. 従兄弟	70	85
6. 甥・姪	38	51
7. 伯父・伯母	37	49
8. 息子・娘	2	1
9. 誰もいない	30	34
10. その他	8	2
11. 不明	7	4
サンプル	211	268

(注) 複数回答

表20 しまへ戻る回数 (人)

	小値賀	(%)	宇久	(%)
1. 1回	48	(22.7)	52	(20.8)
2. 2回	22	(10.4)	22	(8.2)
3. 3回	2	(0.9)	12	(4.4)
4. 4回	6	(2.8)	3	(1.1)
5. 5回	1	(0.4)	4	(1.4)
6. 6回以上	5	(2.3)	6	(2.2)
7. 2～3年に1回	35	(16.5)	53	(19.7)
8. 4～5年に1回	28	(13.2)	35	(13.0)
9. 5年以上の周期で	14	(6.6)	15	(5.5)
10. ほとんど戻らない	34	(16.1)	49	(18.2)
11. その他	4	(1.8)	9	(3.3)
12. 不明	12	(5.6)	8	(2.9)
合計	211	(100.0)	268	(100.0)

は、そうしたしまへの愛着につながる在郷家族との関係はどのようになっているのだろうか。

現在、しまにいる家族・親族(表19)は「兄弟・姉妹」が半数を占め、次に「従兄弟」、「甥・姪」という世代となっている。「親」という割合が低くなっているなかで、すでに「誰もいない」というケースが14%近くを占め、郷里とのつながりが懸念されるところである。

「しまへ戻る回数」(表20)や「どのような時に戻るのか」についてみると、いくつかのパターンに分類される。戻る回数は「年に1回から2



表21 小値賀、宇久へ戻る時 (人)

	小値賀	宇久
1. お盆	60	82
2. 法事	65	81
3. 年末年始	7	13
4. 同窓会	47	37
5. 墓参	34	59
6. 冠婚葬祭	44	94
7. その他	12	27
8. 不明	12	16
サンプル	211	268

(注) 複数回答

回」が31%、「2～3年に1回」と「4～5年に1回」の計も31%、「ほとんど戻らない」が17%である。さらに、どのような時に戻ることについては、法事・お盆・冠婚葬祭・墓参り・同窓会の順になっている（表21）。帰省をうながす要因の上位項目に共通するのは、祖先祭祀に関わることである。生活慣習儀礼のなかで、祖先祭祀というのは、おそらく誰もが大切にしている儀礼と考えられる。つけ加えるならば、儀礼に伴う親族との交流、友人・地域社会の人々との交流とその楽しみは、帰省を考える大きな要因であろう。

自由回答への記述では、「母親へ会いに」「兄弟への挨拶をかねて」等が多い。その一方で「親がいなくなると帰省しなくなる」「知り合いがいなくなって帰省の理由がなくなった」「以前は墓参りだったが墓を移してから帰る機会がない」という記述は、親族・知り合いとの交流や墓参りや等が帰省をうながす大きな要因となっていることを示している。

## 2. 「墓」の移動

ここでは、祖先祭祀に重要な位置を占める「墓」の問題を考えてみたい。「墓」については前述したように、重要なしまへの帰省要因となっていることから、考察が必要であると思われる。移動する現代社会にあって先祖の墓はもちろんのこと、自分自身の「墓」をどのようにするかは誰もが直面する問題である。それはいかに移動する人生であっても、「骨をうずめる」

表22 先祖の墓 (人)

小値賀		(%)
1. 小値賀にある	132	(62.5)
2. 墓を整理し現在の居住地	47	(22.2)
3. 不明	32	(15.1)
合計	211	(100.0)

宇久		(%)
1. 宇久にある	205	(76.4)
2. 墓を整理し現在の居住地	50	(18.6)
3. 不明	13	(4.8)
合計	268	(100.0)

表23 墓の管理 (人)

	小値賀		宇久	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1. 兄弟・姉妹が管理している	71	(53.7)	105	(51.2)
2. 自分で帰郷の度に管理	10	(7.5)	14	(6.8)
3. 親族に依頼してある	36	(27.2)	65	(31.7)
4. 寺に依頼してある	2	(1.5)	8	(3.9)
5. その他	4	(3.0)	4	(1.9)
6. 不明	9	(6.8)	9	(4.3)
合計	132	(100.0)	205	(100.0)

という言葉が意味するのは、どこに落ち着くかという最終的な自分の居場所を決定することにつながるからである。さらに、その選択の結果は、必然的にその土地への定住化を促すことになると考えられる。

「先祖のお墓はどのようになっていますか」(表22)という項目に対する回答は、「しまにある」が平均69% (小値賀62.5% 宇久76.4%) をしめる。その場合の「墓の管理」(表23) は、「しまにいる家族」の項目の回答と一致し「兄弟・姉妹が管理している」場合が多く、次に「親族に依頼してある」となる。この親族は「従兄弟・甥・姪」を指すと考えられる。自由回答欄には「近所の方に依頼してある」「無縁仏になっている」との記述もみられた。一方、すでに「墓を整理し現在の居住地に移した」という割合は平均20% (小値賀22.2% 宇久18.6%) であるが、その内訳をみると小値賀のほうが高い。国勢調査によると宇久よりも小値賀の人口の減少率が高くなっているが、この墓の移動の割合とも深く関連している問題と考

えられる。

個人差はみられるが一般的に、しまにいる親族との関係性が彼らの言葉で言うならば「ふたいとこ」の世代あたりになった場合、彼らの中で親族との紐帯認識、さらにはしまとのつながりの意識は弱くなっていくと推測される。さらにその段階で、親族は「誰もいない」という回答とつながり、「墓」の移動を考える時期を迎えるようである<sup>(7)</sup>。

### 3. 将来のUターン

しまへ戻る意思があるかどうかという「将来のUターン」(表24)については、はっきりと「帰るつもりはない」との回答が平均64.2%を示している。一方、Uターンする意思を示す項目「帰るつもりである」「将来条件が整えば」「定年後に」を合計すると14.4%となる。「わからない」は15.6%で、この項目の回答者が今後どのように気持ちが揺れ動くかは不明であるが、Uターンの可能性も否定できない。この項目を除外したとしても、将来のUターン希望者は現在14.4%存在しているわけである。そのなかで「将来条件が整えば」という回答割合が高いことに注目したい。彼らが考えているUターンできる「条件」とは何か。おそらくこの条件は、しま出身者以外の島外からの移住希望者にも、一部共通する視点とも考えられるし、あるいはしま出身者独自の視点の可能性も強いのである。中・高齢者のなかには、子供時代住み慣れた離島での生活・生産環境の中での生計をより強く望んでいる場合もある。今後、彼らへのインタビュー等を含めた丹念

表24 将来のUターン (人)

	小値賀	(%)	宇久	(%)
1. 帰るつもりである	4	(1.8)	3	(1.1)
2. 将来条件が整えば	23	(10.9)	28	(10.4)
3. 定年後に	4	(1.8)	8	(2.9)
4. 帰るつもりはない	135	(63.9)	173	(64.5)
5. わからない	33	(15.6)	45	(16.7)
6. その他	0	(0.0)	2	(0.7)
7. 不明	12	(5.6)	9	(3.3)
合計	211	(100.0)	268	(100.0)

な調査が必要であろう。人口減少・過疎化対策として、しまの定住人口の増加を図ることが緊急の問題として浮上しているだけに、他出者をどのようにしまに取り込んでいくか、彼らへの調査価値は高いと考えられる。

これまでのしまの現状は親のあとを継ぐタイプのUターンや、都会でうまくいかなかったから戻るというケースで、それもかなり高齢になってからということが多く見られた。青年層は都市生活志向の高まりが振興するなど、一方向的な島外流出の傾向にあったといえる。しかし、ここ数年、長期化している日本の経済的不況の影響によると考えられるが、離島後数年、あるいは数ヶ月でしまへ戻るという若者の急激なUターン現象が見られる。十代後半から二十代の若者で、小値賀町では、2001年8月時点で50名近い人数になっている。小値賀町役場は彼らへの就業機会提供の試みとして、また役場臨時職員の若年化も意図して、若者を公募した経緯がある。一時的なUターン現象なのか、恒常的な流れになるのかしばらく見定める必要があるが、早急に彼らの定住化への対応・対策を練ることを求められている。

#### 4. しまへの誇り

「しま出身であることを誇りに感じたことはありますか」(表25)への回答では、二つのしまに相違がみられた。「ある」が小値賀51.1%、宇久40.6%で、双方の間に10.5%の差が現れている。誇りを感じたときの具体例として圧倒的に多かった回答(自由記述)は自然環境としまの人づきあいに関するもので、上位回答内容は「豊かで美しい自然環境」「人情があること」

表25 しまへの誇り

	小値賀		宇久	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1. ある	108	(51.1)	109	(40.6)
2. ほとんどない	64	(30.3)	111	(41.4)
3. 一度もない	2	(0.9)	6	(2.2)
4. その他	9	(4.2)	12	(4.4)
5. 不明	28	(13.2)	30	(11.1)
合計	211	(100.0)	268	(100.0)

「豊かな人間関係」と連続している。そして「魚のおいしさ」「歴史がある」「生まれ育った故郷だから」等が集中してあげられている。宇久出身者では「誇りを感じたことがほとんどない」「一度もない」という回答のほうで、「ある」という回答より3%高くなっている。この数値は、ほぼ拮抗しているとも指摘できる数値であり、一般的な郷土意識として決して低いものではなく、むしろ高い数値である。しかし、明らかに、宇久出身者よりも小値賀出身者のほうが「しまに対する郷土意識」は高いといえるだろう。

この「誇りを感じたとき」という項目は、「しまへの愛着」とも共通する項目であるが、隣り合う二つの島への調査結果で、いずれの項目もその差は10%以下の数値であり、10%以上の相違がみられたのは、唯一この項目「しまへの誇り」だけであった。この値は、本調査の回収率にも比例しており、郷土意識の高さと調査用紙返送との関連性が如実に現れたと考えられる。

## 5. 郷土まちづくり・活性化への協力

郷土の活性化や行政のありかた等についての項目の中で、「郷土のまちづくりや地域の活性化への協力」（表26）では、「協力したい」（積極的に・ある程度は）という回答が小値賀55.8%、宇久48.4%にのぼる。「ほとんど協力できない」という回答値は低く小値賀19.4%、宇久20.8%である。機会があれば何らかの形で郷土の役に立ちたいと考えている人が多い。行政担当者は、島外に居住するしま出身者がこのような郷土への協力参加の気持

表26 郷土のまちづくり

	小値賀		宇久	
	(人)	(%)	(人)	(%)
1. 積極的に協力したい	24	(11.3)	21	(7.8)
2. ある程度は協力したい	94	(44.5)	109	(40.6)
3. ほとんど協力できない	41	(19.4)	56	(20.8)
4. かかわらなくても良い	1	(0.4)	12	(4.4)
5. わからない	33	(15.6)	39	(14.5)
6. その他	1	(0.4)	3	(1.1)
7. 不明	17	(8.0)	28	(10.4)
合計	211	(100.0)	268	(100.0)

ちを抱いていることを十分に認識し、貴重な人材資源として今後どのように活かしていくか、検討していく必要があるだろう。

## VI. おわりに

人々は社会的ネットワークの結合を通じて、組織された集団の圧力を解消するだけでなく、同時に、社会的ネットワークにより、社会活動が結びつけられ、情報の交換、機会の獲得なども大きく左右され、それを手段として経済的な利益獲得の可能性ももたらされる。その一方で、現代社会において人々がネットワークを結ぶ目的は、ある価値目的を共有する者同士が集い交流することによって得られる精神的リラックスを求めることにおく場合が多い。

同郷という出身地に基づく集まりは、類似した生活経験を持ち、ましてや同じ方言を話す者同士は親近感が湧きやすく、信頼関係や相互扶助の意識も強く、とりわけ強い繋がりが生まれる。とくに、しまは都市から遠く離れた「地方」であり、郷土会が結成された当初は、しまから都市へ移動したしまの若者に対する適応のための援助や情報交換といった相互扶助機能(団結と助け合い)が求められ、郷土会の存在意義は大きかったと推測される。本論で対象とした小値賀・宇久それぞれの同郷人ネットワーク・郷土会の場合は、明らかに、経済的な利益可能性を求めると言うよりは、「親睦」を中心とし、精神的リラックスを求めての活動が展開されている。

祖父江は在京の県人会について調査し、活動の活発度や機関誌の発行状況を目安としながら、県人全体の結合が強い全体結合型と、県の中で地域ごとにまとまっているローカル結合型とに分類し、その歴史的背景とその要因に考察を加えている<sup>(8)</sup>。そのなかで長崎県はローカル結合型の代表的事例として紹介されている。長崎県は多くの小藩に分かれていたため、地域ごとの結合が大変強く、九つの地域部会を県人会がまとめた形をとっていると指摘している。本論で対象とした離島出身者のネットワークのあり

方は、「しま」ごとの郷土会であり、しまごとの結合が強いしま出身者ネットワークである。長崎県人会というよりは「小値賀会」であり「宇久郷土会」であって、しまへの郷土意識が強く現れている。その意味から、まさにローカル結合型であり、本論は祖父江の論を裏付けていることになるだろう。

日本社会で居住地への愛着という場合、「自分の生まれ育ったところだから」といった回答に象徴されるように、出身地が重要な意味を持っている。Uターン、Jターンや盆暮れに見られる人口移動も出身地と居住空間の関連の問題である。そのように、個人の住居移動の状態を規定している（進学・就職・結婚相手を選択する上で出身地がそれらの選択に大きな影響を与えているといったように）ばかりでなく、生まれ育った出身地の違いが個人の気質や意識にも影響を与えているといった点にも、いずれ考察を加えなければならないだろう。さらに、本論文で扱った地域の「しま」ネットワークのあり方がしま固有性のものなのか、あるいは、他の離島出身者のネットワーク形成にも共通するものかどうかについては、今後の課題としたい。

## 注

- (1) 森岡清志1993「社会的ネットワーク」、森岡清志・塩原勉・本間康平（編）『新社会学辞典』有斐閣、644頁。
- (2) 大橋薫／清水新二、1972「都市における親族関係の一考察—川崎市S小学校区の場合」『明治学院論集』195号、5頁。
- (3) 本論文は長崎県立大学国際文化経済研究所の2002年3月発行の調査研究報告書『長崎県における離島進行の方向』の「第13章 くしまへの想い」しま出身者の眼差し：「郷土会」意識調査から—人的ネットワーク構築への提言」を基盤として、「社会的ネットワーク」の分析視点から加筆訂正し大幅に書き直したものである。
- (4) 本論文は「同郷人のネットワーク形成と郷土意識に関する考察」をテーマとしていることから、実施した調査内容の一部（地域の活性化に係わる部分）の分析については割愛してある。その内容については『長崎県における離島進行の方向』2002、長崎県立大学国際文化経済研究所発行159-173頁を参照されたい。
- (5) 調査結果の説明において、小値賀会と宇久郷土会にはっきりした差異が認められ

た場合のみ、数値の後に（小値賀）あるいは（宇久）と記述してある。調査結果が両郷土会とも同様の傾向を示している場合はとくに明記していない。

- (6) 2002年9月小値賀でのフィールド調査での見聞、およびUさん・Tさんへのインタビューより。
- (7) 各郷土会事務局担当者への電話によるインタビュー。
- (8) 祖父江孝男1971『県民性—文化人類学的考察』16-26頁。

## 引用・参考文献

秋津元輝

1998『農業生活とネットワーク』御茶の水書房

陳天璽

2001『華人ディアスポラ—華商のネットワークとアイデンティティ』明石書店

森岡清志・塩原勉・本間康平（編）

1993『新社会学辞典』有斐閣

小値賀町

1997『小値賀町勢要覧』資料編

大橋薫／清水新二、

1972「都市における親族関係の一考察—川崎市S小学校区の場合」『明治学院論集』195号、5頁。

大谷信介

1995『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』ミネルヴァ書房

祖父江孝男

1971『県民性—文化人類学的考察』中央公論社

宇久町

1993『宇久町町勢要覧』資料編

拙稿

2003「第13章 くしまへの想い」しま出身者の眼差し：「郷土会」意識調査から一人的ネットワーク構築への提言」長崎県立大学国際文化経済研究所調査研究報告書『長崎県における離島進行の方向』159-173頁。



資料

「郷土会」意識調査

「小値賀会」ネットワーク意識調査へのご協力をお願い

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

長崎県立大学国際文化研究所（所長 建野堅誠）では、「21世紀における長崎県離島振興ビジョン」として、プロジェクト調査研究に取り組んでおります。このたび、本調査研究の一環として、郷土会（小値賀）会員の方を対象としたアンケート調査を実施することになりました。

この調査は、郷土・小値賀に対する素直なご意見やお考えなどをお伺いし、将来に向けて地域社会全体の活性化を図るための貴重な基礎資料といたします。ご多忙のところ誠に恐縮ではございますが、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、ご回答は、すべて統計的に処理いたします。個人的なデータを公表することは絶対にいたしません。どうぞ、この趣旨をご理解いただき、調査にご協力くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

ぜひとも、率直なご意見やお考えをお書きください。

敬具

平成13年3月

長崎県立大学国際文化経済研究所  
離島振興ビジョンプロジェクトグループ

【アンケートの概要と記入にあたってのお願い】

1. この調査は、郷土会会員の方を対象としております。
2. 同封のアンケート用紙にそのままご記入頂き、返信用封筒にてご返送下さい。4月25日(木)までにご投函下さい。切手を貼っていただく必要はありません。

なお、返信用封筒にも住所・氏名を記入する必要はありません。

3. アンケートは無記名です。お答えは該当する番号を○で囲んでください。その際、質問によって○を囲む数を指定してありますので、ご注意ください。



1. 一人暮らし 2. 夫婦のみ 3. 夫婦と未婚の子供  
 4. 夫婦と既婚の子供（孫がない） 5. 夫婦と既婚の子供（孫がいる） 6. その他（ ）

(7) あなたは育った家族のなかで

（末子にあたる方は〈13. 末子〉にも○をおつけください）

1. 長男 2. 次男 3. 3男 4. 4男 5. 5男 6. 6男以上  
 7. 長女 8. 次女 9. 3女 10. 4女 11. 5女 12. 6女以上  
 13. 末子

(8) ご兄弟・姉妹の人数は？（ご本人を含む）

1. 一人っ子 2. 2～3人 3. 4～5人 4. 6～7人  
 5. 8～9人 6. 10人以上 7. その他（ ）

(9) あなたが小値賀を出られたのは何歳のときですか？

1. 15歳未満 2. 15～18歳 3. 19～20歳 4. 21～22歳  
 5. 23～25歳 6. 26～30歳 7. 31～40歳 8. 41～50歳  
 9. 51～60歳 10. その他（ ）

(10) そのときの離島の理由は？

1. 進学 2. 就職 3. 結婚 4. 親の仕事の都合  
 5. 本人の仕事の都合 5. 子供との同居  
 6. その他（ ）

(11) あなたは小値賀を離れてどのくらいになりますか。

1. 1年以内 2. 2～3年 3. 5～9年 4. 10～19年  
 5. 20～29年 6. 30～39年 7. 40年以上 8. その他（ ）

(12) その間、あなたは小値賀へUターンされたことはありますか。

（一時的な里帰りではなく、生活・居住を目的として）

1. ある (①1回 ②2回 ③3回 ④3回以上) 2. ない

質問2 郷土への愛着や在郷家族との交流についておたずねします。

(1) どちらのご出身ですか。

1. 笛吹郷 2. 前方郷 3. 中村郷 4. 浜津郷 5. 柳郷  
 6. 斑島 7. 大島 8. 納島 9. その他（ ）

(2) 既婚者の方についておたずねします。ご結婚相手（夫・妻）のお生まれはどちらですか。

1. 小値賀 (①笛吹郷 ②前方郷 ③中村郷 ④浜津郷 ⑤柳郷 ⑥

- 斑島 ⑦大島 ⑧納島 ⑨その他 ( )
2. 長崎県 3. 佐賀県 4. 九州・沖縄地方 (長崎・佐賀をのぞく)  
5. 中国・四国地方 6. 中部・北陸地方 7. 関東地方  
8. 東北・北海道地方 9. その他 ( )
- (3) 現在、小値賀にご家族・ご親族はいらっしゃいますか。
1. 両親 2. 父親だけ 3. 母親だけ 4. 兄弟・姉妹 5. 従兄弟  
6. 甥・姪 7. 伯父・伯母 8. 息子・娘 9. 誰もいない  
10. その他 ( )
- (4) 島外に住むご兄弟・お子様の居住地は？ (当てはまる場所全部に○をおつけください)
- 4-1 <ご兄弟>
1. 長崎県 2. 佐賀県 3. 九州・沖縄地方 (長崎・佐賀をのぞく)  
4. 中国・四国地方 5. 中部・北陸地方 6. 関東地方  
7. 東北・北海道地方 8. その他 ( )
- 4-2 <お子様>
1. 長崎県 2. 佐賀県 3. 九州・沖縄地方 (長崎・佐賀をのぞく)  
4. 中国・四国地方 5. 中部・北陸地方 6. 関東地方  
7. 東北・北海道地方 8. その他 ( )
- (5) 先祖のお墓はどのようになっていますか？
1. 小値賀にある
- (\*小値賀にあるとお答えになった方にお聞きます)  
お墓の管理はどのようにされていますか？
- ①兄弟・姉妹が管理している ②自分で帰郷の度に管理  
③親族に依頼してある ④寺に依頼してある (永代供養など)  
⑤その他 ( )
2. 墓を整理し現在の居住地に移動した
- (6) あなたは小値賀に愛着を感じておられますか。
1. 強く感じている 2. まあ感じている 3. あまり感じていない  
4. 感じていない 5. わからない  
6. その他 ( )
- (7) 年に何回くらい小値賀へ戻られますか。
1. 1回 2. 2回 3. 3回 4. 4回 5. 5回 6. 6回以上  
7. 2～3年に1回 8. 4～5年に1回 9. 5年以上の周期で

10. ほとんど戻らない 11. その他 ( )
- (8) どのような時に小値賀へ戻られるのですか。
1. お盆 2. 法事 3. 年末年始 4. 同窓会 5. 墓参  
6. 冠婚葬祭 ( )  
7. その他 ( )
- (9) 将来小値賀にUターンし生活されるお考えはおありですか。
1. 帰るつもりである 2. 将来条件が整えば帰りたい  
3. 定年後に帰ろうと思う 4. 帰るつもりはない 5. わからない  
6. その他 ( )
- (10) Uターン後の生活について
- (\*上記4の項目で、回答1. 2. 3のいずれかを選択された方はお答えください)
1. 自分で何らかの事業をして生計を立てたい  
2. 雇用の職場があれば働きたい 3. 仕事をするつもりはない  
4. ボランティアをしたい 5. とくに考えていない  
6. その他 ( )
- (11) あなたは郷土・小値賀のまちづくりや地域の活性化にどのようにかかわっていきたいと思いますか。
1. 積極的に協力したい 2. ある程度は協力したい  
3. ほとんど協力できない 4. かかわらなくても良いと思う  
5. わからない  
6. その他 ( )
- (12) あなたは小値賀出身であることを誇りに感じたことはありますか。
1. ある (どのようなときでしょうか?) ( )  
2. ほとんどない 3. 一度もない 4. その他 ( )

質問3 小値賀会についておたずねします。

- (1) 入会されてどのくらいになりますか。
1. 1年以内 2. 2～3年 3. 5～9年 4. 10～15年  
5. 16～20年 6. 21～25年 7. 26～30年 8. 31年以上  
9. その他 ( )
- (2) 入会の動機は? (回答は複数でもけっこうです)
1. 知り合いに誘われて 2. 小値賀がなつかしいので  
3. 小値賀弁を聞きたくなくて 4. 故郷の情報が知りたくて

5. 現在の居住地周辺の情報が知りたくて 7. 付き合いで  
8. 仲間に会えるので 9. その他 ( )
- (3) あなたは小値賀会の行事に参加していますか。  
1. よく参加する 2. ある程度参加する 3. あまり参加しない  
4. ほとんど参加しない 5. その他 ( )
- (4) どのような活動・行事が楽しみですか。(2つ挙げてください)  
1.  
2.

質問4 離島の活性化や行政のありかたなどについておたずねします。

- (1) あなたが抱く小値賀町のイメージは？  
1. 美しい自然環境に恵まれた町 2. 新鮮な魚介類の町  
3. 豊かな人間関係の町 4. 犯罪が少ない町  
5. 離島で交通の不便な町 6. 過疎でさびしい町  
5. 歴史・伝統の町 7. わからない  
8. その他 ( )
- (2) 町の魅力と思われるものを3つ挙げてください。  
1.  
2.  
3.
- (3) 帰省時の町の印象について(\* 4つのうち1つに○をおつけください)  
1. 海上交通機関 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)  
2. 漁港内の水質環境 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)  
3. 観光施設 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)  
4. 役場の対応 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)  
5. 道路・側溝 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)  
6. 陸上交通機関 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)  
7. 駐車場 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)  
8. 街灯の設置状況 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)  
9. 教育・文化施設 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)  
10. スポーツ施設 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)  
11. レジャー施設 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)  
12. 医療施設 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)

13. 地区公園施設 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)
14. 高齢者福祉施設 (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)
15. 四季のイベント(行事) (①良い ②普通 ③悪い ④わからない)
- (4) 今後の地域活性化の重点としては、次のどの方向がよいと思いますか。  
(ふたつまで○をつけ、特に重点項目には◎をおつけください)
1. 定住人口(とくに若年層)の増加 2. 観光などの交流人口の増加  
3. 生活環境(社会福祉を含)の改善・整備 4. 人材の育成と活用  
5. 文化・伝統の継承発展 6. 現状のままでよい 7. わからない  
8. その他 ( )
- (5) 地域活性化のために、どのような産業に力を入れたらよいと思いますか。  
(ふたつまで○をつけ、特に重点項目には◎をおつけください)
1. 稲作 2. 畜産 3. 果樹・園芸作物 4. 有機(無農薬)農業  
5. 農産物加工 6. 漁業 7. 養殖漁業 8. 水産加工  
9. 林業・林産加工 10. 地場産業の充実・高度化 11. 企業誘致  
12. 観光 13. 商業 14. サービス業 15. わからない  
16. その他 ( )
- (6) 地域活性化のために、どのような生活環境面に力を入れたらよいと思いますか。  
(ふたつまで○をつけ、特に重点項目には◎をおつけください)
1. 文化施設 2. 医療・福祉施設(サービス) 3. 公園・広場  
4. 学校・教育施設 5. 一般道路やバス輸送の充実 6. 上下水道  
7. 景観・環境の維持・整備 8. わからない  
9. その他 ( )

質問5 「離島」についておたずねします。

- (1) あなたがお考えになる「離島の良さ」についてお教えてください。
- (2) あなたがお考えになる「離島のマイナス面」についてお教えてください。

質問6 離島の活性化や行政のありかたなどについて、あなたのお考えを何でもご自由にお書きください。

\*最後の項目にいたるまで、調査へのご協力感謝申し上げます。有難うございました。